「長与衛生文庫」

(1) 設立趣旨の発表から開庫までの経緯

堀 江 幸 司*

東京女子医科大学図書館

松 田 明 子

東京都養育院
老年学情報センター

平 川 裕 子

千葉県立中央図書館

I. は じ め に

明治20-30年代にかけて、各地に医学図書館(文庫)が設立されている。¹⁾「成医会文庫」(東京医学図書館)(明治18年<1885>),「日本医学図書館」(明治30年<1897>),「京都医学図書館」(明治31年<1898>),「長与衛生文庫」(明治31年<1898>),「大阪医学図書館」(明治32年<1899>),「広島医学図書館」(明治33年<1900>),「長尾文庫」(明治33年<1900>)などである。これらは、各地の衛生会(医師会)、校友会などが中心となって設立したものであった。このうち「日本医学図書館」については、『「日本医学図書館」と金杉英五郎』,²⁾『「日本医学図書館」——神田駿河台周辺と明治35年以降の「日本医学図書館」』³⁾と題して発表した。前者は「日本医学図書館」を人物を中心に概観したもので、後者は、「日本医学図書館」が設置された東京基督教青年会館(神田美土代町)がある神田地区に焦点をあて、「日本医学図書館」の活動の一端を紹介したものであった。本稿では衛生行政の創始者である長与専斎個人の功績を顕彰することを設立目的のひとつとした「長与衛生文庫」について紹介する。

II. 長与専斎と大日本私立衛生会

長与専斎^{せんさい}⁴⁾⁵⁾⁶⁾(1838-1902)は天保9年(1838)8月28日肥前国(長崎県)大村藩の侍医中庵の子として生

れた。この天保9年(1838)は、専斎が後年その塾頭となる蘭学塾(適々斎塾・適塾)が緒方洪庵⁷⁾⁸⁾(29歳)によって大坂瓦町に開かれた年でもある。適塾は現在大阪市東区北浜3丁目30番地に史蹟・重要文化財として保存されている。また、この「緒方洪庵旧宅及び塾跡」⁹⁾の裏手、今橋通りには明治35年(1902)「大坂除痘館跡」に緒方正清によって開設された緒方産婦人科病院がある。

専斎は安政元年(1854)17歳の時、大坂に出て蘭学および医術を緒方洪庵に学んだ。適塾では福沢諭吉と同門であった。塾頭であった福沢が、江戸鉄砲州中津藩邸内に蘭学塾(福沢塾・慶應義塾のはじまり)を開くために適塾を去った安政5年(1858)には、専斎が選ばれて塾頭になった。福沢諭吉と専斎とは肝胆相照らす

長与専斎 (1838-1902)

* Koji HORIE : Tokyo Women's Medical College Library,
8-1 Kawada-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162, Japan

仲で、晩年まで親しい交際が続けられたという。

万延元年(1860)、専齋は長崎に赴いてポンペ (Johannes Lidijs Cathalius Pompe van Meerdervoort, 1829-1908) の医学伝習所に入った。万延元年(1860)といえば桜田門外の変が勃発した年である。あと8年で明治維新という時代であった。ポンペは日本政府が備った最初の外人教師である。翌文久元年(1861)9月20日、幕府はポンペの建議によって、養生所と医学所を設立することになる。この養生所は日本最初の洋式病院で、のち慶應元年(1865)長崎奉行によって、養生所は精得館と改称され、医学所はその附属機関とされた。ポンペは幕府医官の松本良順(佐藤泰然の二男)をはじめ、佐藤 尚中(佐藤泰然の養子)、司馬凌海などに洋式医学を伝習。その後、松本良順を介して長与専齋、緒方惟準(緒方洪庵の二男)、荒瀬幾造、石井久吉などがポンペの教えを受けたのであった。

緒方洪庵 (1810-1863)

明治期に設立された主な医学図書館

文久3年(1863)5月, 専斎は大村藩に歸り, 慶應2年(1866)4月, 藩命によって, 再び, 長崎精得館(医学所)に留学した。

明治元年(1867)10月, 長崎精得館(養生所の改称, 幕府の医学学校)が長崎医学学校となった時, 専斎はその学頭に任ぜられたが, 教頭となったのが慶應2年(1866)にボードウィン(Anthonius Franchoise Bauduin, 1822-1885)の後任として着任したマンスフェルト(C. G. van Mansvelt, 1832-1912)であった。現在上野動物園入口の右側, 大噴水前の木立のなかにひっそりと「ボードワン博士像」^{[10][11]}が建っている。これは, 明治3年(1870)相良知安^[12](初代医務局長, 1836-1906)らが建議して和泉橋通りの元藤堂邸にあった大学東校(東京大学医学部の前身)を上野に移そうとしたことに反対し, この地を公園としたボードウィンの功績に対する顕彰碑である。昭和48年(1973)10月5日上野公園制定100年を記念し, オランダ大使館・東京都・台東区・上野観光連盟の4者の協力によって建てられた。

明治4年(1871)7月, 命によって専斎は江戸に出て文部小丞兼文部中教授となり, 8月には文部省六等出仕に補せられた。同年(1871)10月岩倉具視が特命全權大使として欧米に派遣されるに際して, 専斎はその随員に加えられ, 医事衛生制度を視察した。明治6年(1873)3月, 文部省医務局長(2代)となり, 相良知安の『医制畧則』を受け継ぎ, これを修正して『医制』として明治7年(1874)8月18日, 東京・京都・大阪の三府に発布した。東京大学医学部構内には相良知安の記念碑(昭和10年<1935>3月入沢達吉撰)が建てられている。池之端門を入った正面の小高い丘の上にある。そこからは, 建立当時, 相良が大学東校の移転先に望んだ上野公園がよく見えたという。今では, ビルに遮ぎられて見えない。

明治7年(1874)10月3日, 専斎は東京医学学校々長となり, 明治8年(1875)6月には文部省所管の衛生事務を内務省に移管し, 自ら衛生局長(初代)となった。当時の衛生局には専斎の下に技師として石黒忠憲, 高木

明治中期各地に設立された主な医学図書館(文庫)の関係略図

東京大学医学部の変遷

兼寛^{かねひろ}、長谷川泰^た、後藤新平^{しんぺい}、北里柴三郎^{さい}らがいた。のちに、これらの人々をメンバーとして大日本私立衛生会が設立されることになる。

明治9年(1876)11月、東京医学校本部が本郷の旧前田邸跡に落成した。現在、旧東京医学校本館の遺構が、東京大学理学部附属植物園(小石川植物園)にある。明治10年(1877)4月12日には開成学校(大学南校の改称)と東京医学校(大学東校の改称)とが合併して、日本最初の大学である東京大学が設立され、法・理・文・医の4学部が設けられた。東京医学校は東京大学医学部となる。この時専斎は総理心得となり、明治14年(1881)には、その職を辞している。その後、東京大学医学部は明治19年(1886)3月2日帝国大学令の公布により帝国大学医科大学となり、明治30年(1897)京都帝国大学の創設に伴い、東京帝国大学医科大学と改称された。¹³⁾¹⁴⁾

明治16年(1883)2月18日に長与専斎、石黒忠恵、長谷川泰、後藤新平、高木兼寛、三宅秀^{しゅう}らの主唱によって政府の中央衛生会¹⁵⁾(明治12年<1879>7月22日設立、会長森有礼^{ありのり})に対して「民間に於て衛生の公会を開き……之を大日本私立衛生会と称し、汎く全国同志者の協力を以て衛生の法を民間に普及するの機関に供せんと欲す」ことを目的として大日本私立衛生会¹⁶⁾¹⁷⁾が興せられることになった。中央衛生会が「衛生上の諸問題の諮問、検察或は医師等の行政処分につき審議すること」を主な目的に設立されたのに対し、大日本私立衛生会は、「衛生思想の向上を図ると共に、衛生事務は官民協調して行ひ、或は進んで自治的に之を処置するのが策の得たるものである。」との意見によって、設立されたのであった。設立当時の会頭は佐野常民^{つねたみ}、副会頭は長与専斎、幹事は、高木兼寛、長谷川泰、後藤新平、石黒忠恵、松山棟庵、白根専一、太田実、永井久一郎、三宅秀、田代基徳の10名であった。会頭の佐野常民(1822-1902)は、嘉永元年(1848)に27歳で緒方洪庵の適塾に入門し、嘉永3年(1850)には江戸に出て伊東玄朴¹⁸⁾(1800-1871)の象先堂塾に入り、その塾長を務めた。象先堂塾は、下谷和泉橋通御徒町にあり、診療所、調薬所および医学蘭学門弟寄宿舎などが設けられたという。その後、伊東玄朴は神田小川町に別荘のつもり

で住居を建て、これを蘭学開講所とした。その建物は当時江戸市中で唯一の三階建てであった。それは、幕府の奥医師(安政5年<1858>)として將軍の薬を調合するために必要ということで許可されたものであった。伊東玄朴は神田お玉ヶ池に種痘所を開設¹⁹⁾(安政5年<1858>5月7日)し、東京大学医学部の起源をつくった人物としても有名である。この伊東玄朴の墓(都旧跡)は、江戸・明治のおもかげを今に残す谷中天龍院(天竜院)=台東区谷中4丁目4番地33号にある。また大日本私立衛生会の幹事のひとり松山棟庵¹⁹⁾は福沢塾(慶應義塾)の出身で明治6年(1873)10月、35歳のとき、慶應義塾医学所の開校にあたって、その校長となった人物である。松山と同時期に福沢塾にいた福沢諭吉の門下生としては、渡辺洪基(のち東京大学総長となる)、早矢仕有^{はやしゅうてき}的(のち丸善を起す)がいた慶應義塾

松本順の還暦に集まった
大日本私立衛生会の主な人々

医学校は、明治13年(1880)に閉じられたが、翌明治14年(1881)、松山は高木兼寛と図って、成医会講習所(現・東京慈恵会医科大学)を起し『成医会月報』²¹⁾を発行した。

その後、専齋は明治23年(1890)中央衛生会長、貴族院議員となり、明治25年(1892)1月には宮中顧問官となった。さらに明治34年(1901)には、大日本私立衛生会頭に推されている。

以上のように長与専齋は明治期の衛生行政の中心人物として、その功績は「医制薬制の一新、伝染病予防の設備、地方衛生制度の構成、衛生工事の興起」²²⁾等、多大なものがあつた。明治35年(1902)9月8日午後4時脳貧血のため遠逝。その日、庭にはオシイツクが啼きしきり、百日紅がなお満開であつたという。²³⁾享年65歳であつた。

大正8年(1919)7月25日、専齋が明治18年(1885)頃創設した鎌倉海浜院(療養所)を記念して「松香長与先生紀功碑」(松香は専齋の雅号)が建てられた。場所は鎌倉長谷の大仏境内で、階段を上がった左側の木立の中に今もある。撰文は土肥慶蔵(東京帝国大学医科大学教授=皮膚病学の開祖)によるものであつた。²⁴⁾

Ⅲ. 「長与衛生文庫」設立主旨の発表

明治31年(1898)。この年は長与専齋の還暦にあたる年であつた。永年、衛生行政の最高責任者として、その充実に尽力した専齋の功績を永遠に表彰するために「長与衛生文庫」の設立²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾が計画された。それは、この前年、明治30年(1897)、東京大学医学部別課出身の遠山椿吉²⁸⁾(1857-1928)、川上元治郎らを中心として設立されることになった「日本医学図書館」の活動に刺激されたものでもあつた。大日本私立衛生会の長谷川泰らを中心に「長与衛生文庫」創立事務所が設置され、設立主旨が発表された。その要旨は以下のようなものであつた。

1. 「長与衛生文庫」は衛生医事に関する内外の書籍を蒐集し縦覧に供すること。

1. 「長与衛生文庫」は本年8月28日長与専齋君

還暦誕辰の当日を以て之を設立すること。

1. 「長与衛生文庫」は東京に置き其家屋の貸付及管理方は永遠大日本私立衛生会に請托すること。

1. 出金は金壹圓以上たるへし。

1. 出金者の氏名は大日本私立衛生会雑誌に掲載し且出金者名録を製し永く文庫に保存す。

1. 出金は本年8月20日を以て締切とす。

1. 為替は左所に宛て東京銀座郵便受取所に振込まるへし。

東京市京橋区宗十郎町7番地

大日本私立衛生会事務所内

「長与衛生文庫」創立事務所 発起人(氏名略す)

「長与衛生文庫」創立事務所では、専齋の還暦祝宴会²⁹⁾³⁰⁾を当初明治31年(1898)8月28日の誕生日に開催して、「長与衛生文庫」設立に関する報告を行う予定であつた。しかし、この日程は専齋がこの時期避暑旅行中であること、また酷暑を避けるために一時延期されることになり、1カ月後の9月28日午後1時から芝区芝公園内の紅葉館に於いて举行されることになった。祝宴会当日、紅葉館楼上の大広間には、北里柴三郎の奉祝寄贈に係る蓬萊が飾られ、また福沢諭吉贈呈の銀瓶一対が置かれていた。来会者は、西郷侯爵、石黒男爵をはじめ、朝野から300余名を数えた。来会者のひとり石黒忠憲は、当時、陸軍々医総監で、のちに大橋図書館³¹⁾の開館(明治35年<1902>6月15日開館式)にあたり、協議員となって初代の図書館長を務めた人物である。午後3時から「長与専齋君還暦祝賀会式場」と大書きされた能楽堂において式典が举行された。まず発起人総代として長谷川泰が登壇し、開会の辞ならびに「長与衛生文庫」設立の趣旨を以下のように述べた。³²⁾

「……本日先生の還暦に当りまして、先生の功績は概略申上げました。先生が斯の如き偉大なる事業を我日本帝国に御開きになりましたことは、天下公衆は素より苟くも耳目あるものは知っておりますが、さらに此先生の事業を4千万同胞に顕はしたい。そこで先般御来会諸君の御賛成を得て、我大日本衛生会に於て

『長与衛生文庫』なるものを設け、これを我衛生会の1つの附属事務とすることに致しました。そして、このことについて、満堂の有力なる皆さんを始めと致しまして、広く公衆に募りました所が、果せるかな天下有志の士は欣然としてこれに賛成され、東西南北より賛成の声沸くが如く起りました。今や其事業の資金として凡3千5、6百円集り、さらに1千2千3千の金が集ります有様であります。此衛生文庫は唯単に申上げますと、我先輩長与専斎先生の社会に尽された衛生上の功績を発表する為めに、吾々が御賛成を得て計画して此運びに至ったものであります。しかしながら、斯の如く多くの賛成を得て此事業が成立つということは、我日本帝国の公衆衛生の前途に対して如何ばかり間接の感動がありませうか。私は大なる感動を与へると信じます。……[筆者要約]

長谷川泰は専斎の功績を広く一般大衆に顕彰するために、「長与衛生文庫」を大日本私立衛生会の附属事業のひとつとして行うことを表明したのであった。

この長谷川泰の趣旨説明のあと、三宅秀の演説、北里柴三郎の大日本私立衛生会々頭・土方久元の祝辞代読、高木兼寛のホイットニーの書簡朗読、金杉英五郎の福沢諭吉の祝文代読が続き、その後饗宴に移った。土方会頭の祝辞を代読した北里柴三郎と専斎とは、ともにオランダ人医師マンズフェルトに師事したことがあった。北里は熊本で、専斎は長崎で訓導をうけている。

北里柴三郎³⁵⁾(1852-1931)は嘉永5年(1852)12月20日生。肥後国阿蘇郡小国郷北里村の出身。明治8年(1875)東京医学校に入学。この時の校長が専斎であった。明治19年(1886)1月、35歳の時ローベルト・コッホ(Robert Koch, 1843-1910)に師事し、明治25年(1892)までの6年間細菌学を学んだ。その間、明治22年(1889)には破傷風菌の純培養に成功している。明治25年(1892)5月28日帰朝した北里に対して、時の政府は細菌学研究のための場所を与えなかった。これは、北里の帰朝が年度内であったために政府としては、すぐには予算がとれないという事情もあった。しかし、専斎(衛生局長)は「北里の如き此の研究〔ツベリクリン〕に関係深き人を目前に差置ながら、帰朝以来半

年の日子を閑却せしむるは惜しむべき限りなり」³⁵⁾として北里を福沢諭吉に推挙した。このあたり専斎の衛生行政に対する積極的な姿勢と、いかに北里に期待を寄せていたかわかる。福沢は「学者の推轡は余が道楽の一つである。私力を以て其の手初めを為さう。幸に芝公園内に借地があるから此所に必要なだけの家屋を構へ、兎も角も試験のことを始めるがよい。素より十分の事は出来まいが何れ又他日の計もあるであらう」³⁶⁾として芝公園内に家屋を提供することになった。この時から福沢は北里の生涯の恩人のひとりとなる。その建物は、二階建て、建坪10余坪、上下6室の小さなものであった。民間における伝染病研究所のはじまりである。

ところで当時、大日本私立衛生会においても伝染病研究所設立の計画があった。そこで、この福沢が北里のために設立した伝染病研究所を、大日本私立衛生会の委託による伝染病研究所とすることが議せられた。専斎は福沢を訪ねて、「北里博士のために新築した家屋および土地を、そのまま同会において引き受け経営したい」³⁶⁾と申し入れた。この専斎の申し出に対して、福沢は「北里博士によって伝染病研究の事業が遂行せらるるならば、何人が之を経営するとも余の頓着する所ではない」³⁶⁾として大日本私立衛生会に伝染病研究所の経営を一任したのであった。大日本私立衛生会伝染病研究所の誕生である。明治25年(1892)11月30日のことであった。明治27年(1894)2月、芝区愛宕町に大日本私立衛生会伝染病研究所の新所屋が成り、国庫補助を受けるようになった。野口清作(英世)が入所したのが、この大日本私立衛生会所管時代の伝染病研究所である。明治31年(1898)4月清作23歳の春のことであった。明治32年(1899)には、内務省管轄の官立伝染病研究所となり、明治38年(1905)に芝区白金台町に新築移転した。大正3年(1914)10月14日大隈内閣の時、伝染病研究所が内務省から文部省に移管され、東京帝国大学医科大学に所属されることになった。北里は敢然とこれに反対して伝染病研究所を辞し、自身の北里研究所³⁷⁾(芝区白金三光町)を設立させた。

以上のように伝染病研究所(北里研究所)は、いつも順調というわけにはいかなかったが、その時々にお

いて北里を援助したのが専齋であった。このような北里と専齋との関係から、北里は、「明治31年長与翁の還暦を祝して長与衛生文庫の企てるるや、率先して此の事業の実現に務め、以て我国の衛生行政創始者の功勞と教訓とを後世に伝へんことを期した」³⁵⁾のであった。

IV. 開庫までの経緯

明治31年(1898)10月現在で「長与衛生文庫」創立のための資金として寄付された金額は3,600円余に達し、大日本私立衛生会の82の支会も、この資金募集に尽力した。また、大阪、三重、横浜、および新田郡(上野国)の各私立衛生会も資金の募集に協力している。さらに高山紀齋^{きさい}、ホイットニー、有末清治郎、岡謙蔵は、書籍を寄贈したという。³⁸⁾

高山紀齋³⁹⁾(1850-1933)は備前岡山の出身。明治2年(1869)11月、20歳のとき藩命によって慶應義塾に留学。明治23年(1890)高山歯科医学院(芝区伊皿子町)を住居隣地に設立した。この高山歯科医学院は、当時本邦唯一の歯科医育成機関で、のち明治33年(1900)2月に至って血脇守之助^{ちわきもり のすけ}(高山歯科医学院講師)によって東京歯科医学院(東京歯科医学専門学校、現・東京歯科大学の前身)として引き継がれることになる。血脇守之助⁴⁰⁾(1870-1947)は野口清作(英世)⁴¹⁾⁴²⁾の育ての親となり、会津から上京してきた清作を明治29年(1896)高山歯科医学院の学僕とし、のち講師とした人物である。血脇守之助の顕彰碑が、現在千葉県我孫子市の手賀沼公園にある。この「血脇先生謝恩之碑」⁴³⁾⁴⁴⁾は、以前は生家跡の大光寺の山門右側に建てられていたが、昭和53年(1978)都市改造のために手賀沼公園内の湖畔に移された。血脇守之助も慶應義塾の卒業(明治22年<1889>4月25日)で高山紀齋と血脇守之助とは、ともに福沢諭吉の門下生ということになる。

当時、この高山歯科医学院で生理学・病理学の講座を担当していたのが、「日本医学図書館」の設立者のひとり遠山椿吉(東京顕微鏡院々長)であった。遠山椿吉は血脇守之助が東京歯科医学院を開校するにあたって、細菌学・生理学の講義を引き受けたほか、東京顕微鏡院(神田小川町1番地)の一室を夜間に限って提

供している。それは、遠山椿吉が明治24年(1891)、顕微鏡検査所(東京顕微鏡院の前身)を高木兼寛の成疾会(現・東京慈恵会医科大学)の一室を借りて設立したことに類似している。東京歯科医学院の開校式(明治33年<1900>2月12日)は、「日本医学図書館」の開館式が行われた神田青年会館(Y M C A)の大講堂で挙行された。

ところで明治31年(1898)当時、神田医師会・衛生会の会長であった金杉英五郎(東京慈恵会医科大学<旧制>初代学長)は、東京歯科医学専門学校の財団監事でもあった。昭和4年(1929)4月10日竣工した東京歯科医学専門学校新校舎(神田三崎町)の落成式(昭和4年<1929>11月2日)では、司会役を引き受けている。

金杉英五郎⁴⁵⁾⁴⁶⁾(1865-1942)は千葉県香取郡古城村の出身。我国における耳鼻咽喉科の草分けとして有名である。昭和17年(1942)1月26日急性肺炎を患い、芝区神谷町18番地の自邸において逝去。東京慈恵会医科大学前の青松寺^{せいしやうじ}(芝区愛宕町)に葬られた。

この金杉英五郎が経営する金杉病院は、神田駿河台南甲賀町(現在の千代田区神田駿河台1丁目)にあった。金杉病院は大正11年(1922)に木造二階建ての病棟をふくめて敷地ぐるみ3万円で売りに出され、主婦の友社が買収した。⁴⁷⁾現在明治大学前の主婦の友社となっているあたりが金杉病院のあった場所である。この金杉病院の並びには、尾崎行雄邸、浜田玄達邸、佐々木東洋邸などがあった。

金杉英五郎と遠山椿吉とは、神田衛生会、東京慈恵院医学校のほかに東京歯科医学院(東京歯科医学専門

東京耳鼻咽喉科醫院(金杉病院)

学校)でもつながる。高山紀斎は明治17年(1884)9月から明治33年4月まで、医術開業試験の委員を務めていた。遠山椿吉の「日本医学図書館」の設立の目的のひとつが、医術開業試験受験のための勉学の場と医学書を学生に提供することであったことを考えると、高山紀斎は「長与衛生文庫」だけでなく「日本医学図書館」へも歯科衛生関係の図書を寄贈したものと思われる。また高山紀斎は、明治23年(1890)当時、大日本私立衛生会推為審議委員を務め、大日本私立衛生会とも関係があった。高山紀斎の「長与衛生文庫」への図書の寄贈は、金杉英五郎および遠山椿吉との関係からと思われる。

また「長与衛生文庫」に書籍を寄贈したホイットニー⁽⁴⁸⁾(Willis Norton Whitney, 1855-1918)は伝道医師。アメリカ、ニュージャージー州ニューアーク出身。彼の妹は勝海舟の息子梅太郎と結婚したクララである。父ウィリアム・コグスウェル・ホイットニー(William Cogswell Whitney, 1825-1882, 外国人宣教師)とともに、明治8年(1875)来日。明治12年(1879)7月、東京医学校に入学し、ベルツ⁽⁴⁹⁾(Erwin Boelz, 1849-1913)について医学(眼科)を学んだ。明治13年(1880)家族とともに帰米。ペンシルベニア大学医学部に入学し、翌年卒業した。明治15年(1882)11月、再び来日。英米系医学の普及に尽力し、当時英米系医学の中心的存在であった成医会の高木兼寛⁽⁵⁰⁾(1849-1920)(海軍々医総監、東京慈恵会医科大学の創立者)を助けた。明治17年(1884)10月、成医会の幹事となり、その後副会長に選ばれた。明治18年(1885)1月には、「成医会文庫」(東京慈恵会医科大学医学情報センターのはじまり)の設立委員に外人側委員として、ヘボン⁽⁵¹⁾(James Curtis Hepburn, 1815-1911)、エルドリッジ⁽⁵²⁾(Stuart Eldrige, 1843-1901)とともに選出された。この「成医会文庫」設立の日本側委員のひとつが専斎であった。ホイットニーは明治19年(1886)母アンナの死亡に際しておくられた弔意金をもとに赤阪病院⁽⁵³⁾を設立、その教師となる。この赤阪病院では「日本医学図書館」の設立者のひとり川上昌保(キリスト者、米国医学士)もスタッフの一員として診療した。赤阪病院は昭和2年(1927)その活動を中止したが、その建物の一部はホイットニー記念赤坂福音会(現在の赤坂教会)と

して残された。ホイットニーの「長与衛生文庫」への図書の寄贈は、専斎自身および高木兼寛、川上昌保との関係からと思われる。

明治31年(1898)12月5日午後4時より、長谷川泰、柳下士興、金杉英五郎、鳥居春洋、阪本彰之助の大日本私立衛生会の幹部6名と、長与専斎の長男である長与稱吉が大日本私立衛生会事務所に参会した。⁽⁵⁴⁾その目的は、「長与衛生文庫」の事業ならびに事務取扱い等に関する諸般の件を審議して文庫の設立を具体化させることにあった。「長与衛生文庫」は、当初、大日本私立衛生会の有志(「長与衛生文庫」設立事務所)が専斎個人の功績を永遠に表彰するために設立させようとしたものであった。「長与衛生文庫」の設立を具体化させるにあたって、その業務を大日本私立衛生会の付属事務のひとつとし、「長与衛生文庫」の設立を「長与衛生文庫」設立事務所から引き受けることになる。「長与衛生文庫」を大日本私立衛生会の業務のひとつとすることは、すでに長谷川泰の趣旨説明のなかで明らかなことではあった。そのための協議員を決めることになり、明治31年(1898)12月26日、長与専斎邸に北里柴三郎、大沢謙二、柳下士興、山根正次、鳥居春洋が参会して以下のように選定した。⁽⁵⁴⁾⁽⁵⁵⁾

主 幹：長谷川泰

協議員：三宅秀、北里柴三郎、柳下士興、阪本彰之助、
長与稱吉

この主幹となった長谷川泰(1842-1912)は、長与専斎、石黒忠恵などと並ぶ明治医政界の中心人物のひとつである。野口清作(英世)、鷺山(吉岡)弥生(東京女子医科大学の創立者)などが学んだ済生学舎(1876-1902)の創立者でもある。

協議員の筆頭である三宅秀⁽⁵⁶⁾(1848-1938)は、明治14年(1881)に石黒忠恵のあとを継いで東京大学医学部長(明治14年<1881>7月14日から明治23年<1890>11月11日まで)となり、明治19年(1886)3月2日帝国大学医科大学長(初代)になった人物で、明治18年(1885)には「成医会文庫」の設立委員としても活躍した。長

与稱吉(1866-1910)は専斎の長男。胃腸病専門病院の始祖となった人物である。夏目漱石が胃病を患い治療を受けたのも、長与稱吉が院長の長与胃腸病院(麹町区内幸町)であった。⁵⁷⁾

明治32年(1899)2月3日、大日本私立衛生会の楼上において長谷川主幹のもと「長与衛生文庫」設立準備のための第1回協議委員会が開催された。⁵⁵⁾ さらに明治32年(1899)4月8日には、長谷川泰、北里柴三郎、長与稱吉、柳下士興が参集し、「長与衛生文庫」の管理について協議している。⁵⁶⁾ この会合に出席した協議員のひとり柳下士興は内心おもしろからぬものがあつた。彼は、「長与衛生文庫」を官立ではない私立の衛生会が公共事業の一環として設立させるからには、専斎の名誉のためにも相当立派なものを作りたいと考えていた。しかし、衛生会の一部には「文庫は長与翁個人の還暦に就いて出来たものなのに、衛生会の事務としてやるのは何事だ」という意見もあった。柳下は文庫設立の資金として、5,000~6,000円程度の寄付金のほかに、大日本私立衛生会の財産から50,000~100,000円を支出することを考えていたが、協議の結果、「長与衛生文庫」の大日本私立衛生会への委託は白紙にもどされることになった。各地の衛生会、あるいは個人から寄付金を受けながらも、「長与衛生文庫」は大日本私立衛生会から、一時分離されることになるのである。⁵⁹⁾

(つづく)

注1) 神田お玉ヶ池種痘所の開設年：谷中天龍院の案内板には、安政4年(1857)とある。

注2) ヘボン(James Curtis Hepburn, 1815-1911)：ヘボン式ローマ字の創案者。明治学院を創設(明治20年<1887>)。

注3) エルドリッジ(Stuart Eldrige, 1843-1901)：お雇い医師。明治4年(1871)北海道開拓の技師団の一員として来日。アメリカではジョージタウン医科大学の解剖学教室の助手および合衆国農務省図書館の司書官を務めた。明治33年(1900)10月には成医会の副会長となり、高木兼寛を助けた。

引用文献

- 1) 堀江幸司：明治30年代前半における「医学図書館」設立の動き。第2回図書館情報サービス研究大会、1985。P. 26
- 2) 堀江幸司：「日本医学図書館」と金杉英五郎。医学図書館、32(2)：187-191、1985。
- 3) 堀江幸司：「日本医学図書館」-神田駿河台周辺と明治35年以降の「日本医学図書館」。32(3)：290-297、1985
- 4) 松香私志。小川鼎三、酒井シヅ校注：松本順自伝・長与専斎自伝(東洋文庫386)。東京、平凡社、1980。pp. 103-185。
- 5) 長与専斎と長崎医学校。伴忠雄：適塾をめぐる人々-蘭学の流れ-。大阪、創元社、1981。pp. 63-66。
- 6) 長与専斎(1838-1902)。杉村彩雨：近代名医伝。仙台、1972。pp. 133-159。
- 7) 適塾記念会：緒方洪庵と適塾。大阪、同会、1980。
- 8) 緒方富雄：緒方洪庵伝 第2版。東京、岩波書店、1963。
- 9) 適塾、13号(適塾修復完成記念・緒方洪庵と適塾展 特集号)。大阪、適塾記念会、1981
- 10) 上野公園生みの親とは。松本和也：台東区史跡散歩(東京史跡ガイド ⑥)。東京、学生社、1977。pp. 37-38。
- 11) 上野公園・浅草公園。小森隆吉：台東区の歴史(東京ふる里文庫 6)。東京、名著出版、1978。pp. 99-104。
- 12) 鍵山栄：相良知安。東京、日本医学資料センター、1973。
- 13) 医学部の名称と所在地の変遷一覧。小川鼎三：東京大学医学部百年史。東京、東京大学医学部創立百年記念会、1967。P. 288
- 14) ジャーナリズムと学問の伝統。渡邊傳：出版販売小史。東京、東京出版販売、1959。pp. 5-13。
- 15) 中央衛生會職制及事務章程。厚生省医務局：医制

- 百年史(資料編). 東京, ぎょうせい, 1976. pp. 9-10.
- 16) 大日本私立衛生会. 出雲医師会史編纂委員会: 出雲醫師會史. 出雲, 出雲医師会, 1981. pp. 47-48
- 17) 大日本私立衛生会. 日本公衆衛生会: 公衆衛生の発達-大日本私立衛生会雑誌抄-東京, 同所, 1967. pp. 21-100.
- 18) 伊東玄朴. 中村薫: 神田文化史. 東京, 史蹟研究会, 1935. 神田の先哲 pp. 51-53.
- 19) 鈴木要吾: 松山棟庵先生伝. 東京, 松山病院, 1943.
- 20) 早矢仕有次の出身. 丸善百年史 上巻. 東京, 丸善, 1980. pp. 21-31.
- 21) 山崎茂明: 目で見る東京慈恵会医科大学雑誌の歴史. 東京慈恵会医科大学雑誌, 100: 1347-1358, 1985.
- 22) 会頭の薨去. 大日本私立衛生会雑誌, 232: 587-589, 1902.
- 23) 父君の死. 長与博士記念會: 長与又郎傳. 東京, 同所, 1944. pp. 87-92.
- 24) 故長与専斎翁記念碑除幕式. 大日本私立衛生会雑誌, 436: 451-452, 1919.
- 25) 長与衛生文庫の創立. 大日本私立衛生会雑誌, 181: 347, 1898.
- 26) 衛生文庫の創始. 大日本私立衛生会雑誌, 185: 599-600, 1898.
- 27) 長与衛生文庫創立せらる. 順天堂医事研究会雑誌, 277: 691-693, 1898.
- 28) 堀江幸司: 「日本医学図書館」設立者のひとり 遠山椿吉 (鶴見総持寺に墓を尋ねて). 医学図書館, 32(4): 430, 1985.
- 29) 長与専斎君還暦祝宴. 大日本私立衛生会雑誌, 184: 533, 1898.
- 30) 長与専斎翁還暦祝賀会の景況. 順天堂医事研究会雑誌, 282: 945-948, 1898.
- 31) 坪谷善四郎: 大橋図書館四十年史. 東京, 博文館, 1942.
- 32) 長与専斎君還暦祝宴會. 大日本私立衛生会雑誌, 185: 562-584, 1898.
- 33) 北里博士回想の一節. 山崎正董: 肥後醫育史. 熊本, 鎮西醫海時報社, 1929. pp. 377-379.
- 34) 北里先生を憶う. 北島多一: 北島多一自傳. 東京, 北島先生記念事業会, 1955. pp. 82-89.
- 35) 先生と長与専斎翁. 宮島幹之助: 北里柴三郎傳 (北里研究所蔵版). 東京, 北里研究所, 1932. pp. 151-154.
- 36) 傳染病研究所. 其の一. 宮島幹之助: 北里柴三郎傳 (北里研究所蔵版). 東京, 北里研究所, 1932. pp. 61-76.
- 37) 北里研究所: 北里研究所五十年誌. 東京, 同所, 1960.
- 38) 長与衛生文庫彙報. 大日本私立衛生会雑誌, 185: 600, 1898.
- 39) 高山紀斎. 東京歯科大学: 東京歯科大学創立70周年記念誌. 東京, 同所, 1961. pp. 40-41.
- 40) 血脇守之助傳編集委員会: 血脇守之助傳. 東京, 東京歯科大学, 1979.
- 41) 奥村鶴吉: 野口英世(復刻). 東京, 野口英世記念会, 1976.
- 42) 野口英世記念会: 野口英世博士生誕百年記念誌. 東京, 同会, 1978.
- 43) 血脇守之助碑-野口英世の育ての親. 我孫子教育委員会: 我孫子市の史跡を訪ねる (我孫子市史跡ガイドブック). 1983. pp. 32-33.
- 44) 血脇守之助碑. 「郷土あびこ」編集委員会: あびこの郷土史散歩 (郷土あびこ第3号). 千葉, 我孫子市史研究センター, 1981.
- 45) 金杉英五郎. 古城村誌復刻刊行会: 古城村誌(前後編). 千葉, 千葉県香取郡千湊町古城村誌復刻刊行会, 1973. pp. 401-402.
- 46) 西山信光: 極到余音. 東京, 金杉博士彰功會, 1935.
- 47) 駿河台の病院あと. 主婦の友社: 主婦の友社の五十年. 東京, 同所, 1967. pp. 97-98.
- 48) ウィリスの生涯. 沢沢輝二郎: 海舟とホイットニー. 東京, TBSブリタニカ, 1981. pp. 46-53.
- 49) Schottlaender, F. (石橋長英訳): エルウィン

フォン ベルツ―日本に於ける一ドイツ人医師の生涯と業績。京都，日本新薬，1971。

- 50) 東京慈恵会医科大学創立85年記念事業委員会：高木兼寛伝。東京，中央公論事業出版，1965。
- 51) エルドリッジ。石橋長英，小川鼎三：お雇い外国人 9 医学。東京，鹿島研究所出版会，1969。pp. 164-166。
- 52) 赤阪病院：渋沢輝二郎：海舟とホイットニー。東京，TBSブリタニカ，1981。pp. 69-73。
- 53) 長与衛生文庫彙報 其二。大日本私立衛生会雑誌，187:741-742，1898。
- 54) 長与衛生文庫彙報 其三。大日本私立衛生会雑誌，188:70-71，1899。
- 55) 長与衛生文庫彙報 其四。大日本私立衛生会雑誌，189:154-155，1899。
- 56) 福田雅代：桔梗―三宅秀とその周辺―。東京，岩波ブックセンター信山社，1980。
- 57) 荒正人：夏目漱石全集 別巻―漱石研究年表。集英社，1975。
- 58) 長与衛生文庫彙報 其五。大日本私立衛生会雑誌，191:319，1899。
- 59) 長与衛生文庫。日本公衆衛生協会：公衆衛生の発達―大日本私立衛生会雑誌抄―。東京，同所，1967。pp. 369-370。

参 考 文 献

- 1) 長与衛生文庫。大日本私立衛生会雑誌，234:706-707，1902。

- 2) 長与衛生文庫彙報。衛生文庫の開庫。大日本私立衛生会雑誌，235:829-831，1902。
- 3) 長与衛生文庫彙報。衛生文庫の開庫。大日本私立衛生会雑誌，236:905-909，1903。
- 4) 金圓の寄贈。大日本私立衛生会雑誌，236:909，1903。
- 5) 故長与翁肖像の寄贈。大日本私立衛生会雑誌，236:909，1903。
- 6) 長与衛生文庫の閲覧開始。大日本私立衛生会雑誌，249:82，1904。
- 7) 大日本私立衛生会新築落成並に第29次定期総会挙行概況。大日本私立衛生会雑誌，338:1-6，1911。
- 8) 本年6月25日落成式を挙げたる本会会堂正面。大日本私立衛生会雑誌，338:写真のページ，1911。
- 9) 長与衛生文庫の開館式。大日本私立衛生会雑誌，403:643-644，1916。
- 10) 大日本私立衛生会の講習証書授与式と長与衛生文庫開館式。東京医事新誌，1999:2522，1916。
- 11) 長与衛生文庫開館式。医海時報，1169:1939，1916。

今回の参考文献には、次回執筆に関係ある主なものをあげた。大日本私立衛生会の年次総会で報告された「長与衛生文庫に関する件」の記事は省略した。

今回は「(2) 開庫とその活動」と題して、宗十郎町時代と大手町時代の「長与衛生文庫」の活動の一端を紹介する予定。

*

*

*

長与専斎年譜

- 天保9年(1838) 0歳 8月28日肥前国(長崎県)大村藩の侍医中庵の子として生れる。
- 安政元年(1854) 17歳 大坂に出て、蘭学および医術を緒方洪庵に学ぶ。適塾では福沢諭吉と同門であった。
- 安政5年(1858) 21歳 福沢諭吉が江戸に蘭学塾を開くために適塾を去ったため、専斎が選ばれて塾頭となる。
- 万延元年(1860) 23歳 長崎に赴いて、ボンペの医学伝習所に入る。
- 文久3年(1863) 26歳 5月、大村藩に帰る。
- 慶應2年(1866) 29歳 4月、藩命によって再び長崎精得館に留学。
- 明治元年(1867) 30歳 10月、長崎精得館が長崎医学校となったとき、その学頭に任ぜられる。
- 明治4年(1871) 34歳 7月、命によって江戸に出て文部小丞・文部中教授となり、8月には文部省六等出仕に補せられる。
- 10月、岩倉具視が全権大使として欧米に派遣されるに際してその随員に加えられ、医事衛生制度を視察。
- 明治6年(1873) 36歳 文部省医務局長(2代)となる。
- 明治7年(1874) 37歳 相良知安(初代医務局長)の『医制畧則』を受け継ぎ、これを修正して『医制』として、8月18日、東京・京都・大阪の三府に発布。
- 10月3日、東京医学校々長となる。
- 明治8年(1875) 38歳 6月、内務省初代衛生局長となる。このとき、文部省所轄の衛生事務は内務省に移管される。
- 明治10年(1877) 40歳 4月、開成学校と東京医学校とを合併して東京大学が設立された。東京医学校は、東京大学医学部となり、専斎は綜理心得となる。
- 明治14年(1881) 44歳 綜理心得を辞す。
- 明治16年(1883) 46歳 2月18日、石黒忠恵・長谷川泰・後藤新平・高木兼寛・三宅秀らとともに、大日本私立衛生会を興す。会頭は佐野常民、副会頭は長与専斎。
- 明治23年(1890) 53歳 中央衛生会長・貴族院議員となる。
- 明治25年(1892) 55歳 1月、宮中顧問官となる。
- 明治31年(1898) 61歳 専斎の還暦にあたり、その功績を顕彰するために「長与衛生文庫」の設立が計画される。9月28日、「長与衛生文庫」設立に関する報告を芝区芝公園内の紅葉館において举行。(長与専斎還暦祝賀会)
- 明治34年(1901) 64歳 大日本私立衛生会頭に推される。
- 明治35年(1902) 65歳 9月8日、病没。